

宿題

石田 惣

私と大垣さんとのおつきあいは、修士1回生の春に初めて参加した番所崎貝類調査に始まる。これは和歌山県白浜町番所崎の平坦な岩礁に8m×8mの方形枠を69個設置し、枠内に出現するすべての貝類の密度評価をするというもので、大垣さんはこれを1985年に始めて毎年欠かさず続けておられた(Ohgaki et al., 2011)。これから岩礁潮間帯で研究を始めようという大学院生にとって、この調査は相当インパクトがあって、しかも得るものが大きかった。普通種の見分け方に始まって、潮位の変化に伴って出現種の構成も変わることに、近縁種でも微妙に生息環境が異なること、捕食や寄生・共生といった種間関係、そして想像していたよりも非常に多くの種が生息しているということ、といった、初歩的なことではあるものの、しかし日本の暖温帯の潮間帯生態学を進める上で欠かせない基礎を知る貴重な機会となった。私の以降の研究活動は、この調査に少なからず影響を受けることになる。院生の時に選んだテーマは肉食性腹足類の採餌生態であったが、私の調査はなんとなく番所崎のタイドプールに格子状に方形枠を設置して、その中で出現する捕食者と餌生物を毎月やみくもに記録するということから始まった。当時意識はしなかったが、どこことなく番所崎貝類調査の雰囲気を実感していたようにも思える(ただ、私の調査には何かを明らかにしようという研究の方向性が見通しが点で、番所崎貝類調査とは違っていた)。

大学院の課程を終えた後、私は博物館に職を得て、福井県に引っ越した。見知らぬ土地で生活を始めるにあたって、多くの方から励ましの言葉を戴いた。大垣さんから直接そういう言葉を貰うことはなかったが、大垣さんは後述する連絡誌「Argonauta」に「ぼくはどうしてここにいるの？」(大垣, 2002)という巻頭言を書かれた。野外研究者はフィールド(研究地)をホーム(居住地)に近い場所に設定すべき。経費・時間が節約でき、土地勘を頼りに良質なデータがとれ、情報収集にも有利。だから、就職で元のフィールドを離れる若い人も「地に足をつけた研究を」、という内容である。名指しはしていないものの、この文章はおそらく私に宛てられていると、個人的にはそう思っている。これを読んだ時、正直「余計なお世話だなあ」とは思ったものの、地元を意識しようと思う後押しになったのは事実で、結果として福井では自然の豊かな陸域のフィールドにも出るようになり、関心を持つ分類群に幅が生まれた。

和歌山を離れて以降、番所崎貝類調査をお手伝いすることはなくなってしまったが、大垣さんとのおつきあいは続いていた。大垣さんは「アルゴノート(関西海洋生物談話会)」

という不定期のゼミを主宰されていて、その連絡誌という位置づけで「Argonauta」を発売されていた。ちょうど世の中は論文の電子化という流れにあって、私が職場のサーバーをいじりやすい立場だったこともあり、Argonauta をウェブで公開するお手伝いをするようになった。研究機関に所属しない大垣さんにとって、Argonauta は自身の論理思考を展開し、それを公開発信する場としての機能を持っていた。大垣さんは海の近くに住むメリットをとりつつも、地理的な情報格差を意識していたのかもしれない。ライフワークをまとめた「浅海生物相の長期変動・紀州田辺湾の自然史」(大垣, 2010) は紙の本を自費出版されたが、同時に PDF 版のウェブ公開もしたい、できればダウンロード数もカウントしたいが、と熱心に相談された。情報発信手段としてのネットの力を確信されていたのだろう。

Argonauta のサイトの維持は私が今の職場に異動してからも続けたが、大垣さんとの接点はそれにとどまっていた。少し展開するのは、2010 年から 11 年にかけて、大垣さんから二つのデータの提供依頼を受けたことから始まる。一つは、今の職場を事務局とする大阪湾海岸生物研究会が行っている「大阪湾南東部岩礁海岸定点調査」のデータだった。この調査は 6 ヶ所の定点を設定し、出現種のみを記録するという定性調査で、番所崎貝類調査には定量性がかなわないが、1980 年から毎年継続しており、うまく解析すれば長期変動を検出するデータセットかもしれない。大垣さんは番所崎のデータの取りまとめにかかっている、貝類相の長期変動について黒潮流域の他地域とも比較したいと考えておられた。利用してもらえたらそれはうれしい、とお返事し、すでに印刷物になっているデータとは別に、解析に使いやすい生データをお渡しした。

もう一つは、私が院生だった 2000 年の夏に番所崎で行ったウニの分布の調査データだった。この調査はひよんなきっかけから研究室の後輩の長行司君とその友人の小林君との 3 人で行ったもので、調査区の分け方や密度評価法は「畠島調査」(詳しくは Ohgaki et al., 1997) をほぼ真似ており、やはり大垣さんの影響を受けている。それはさておき、そのデータを大垣さんは覚えていて、近年の番所崎のウニ相の変化に気付いておられた。10 年ぶりに同じ方法で比較をしてみたい、については調査を手伝ってもらえないだろうか、というご提案だった。シーズン中の大潮の予定を空けるのは難しく、調査は手伝えないが、2000 年のデータ提供は喜んで、というお返事をした。

思えば無理をしてでも一緒にフィールドに行けばよかったのだが、これは後悔というほかない。ただ、大垣さんとは 2011 年 6 月に番所崎でばったりお会いすることになる。環境省モニタリングサイト 1000 の磯環境のサイトを番所崎に設置していて、私はそのサイト担当者になっているのだが、岩礁に設置している温度ロガーをハンマーで叩いて外している時、向こうから声をかけてきたのが大垣さんだった(研究者のこういう作業音には敏感なのだろう)。開口一番「なんだ、来てるんだったらウニの調査手伝えよ」と言った後、モニタリングサイト 1000 の永久方形枠(25cm×25cm が 30 個)を一瞥して、調査方法のことを尋ねてきた。そうして、即座にコドラートの小ささと数の少なさのデメリットをず

らずらっと挙げた。もちろんそれは自覚している問題点だったが、大垣さんには一瞬で見抜かれた。そこを何とか取り繕って、生物相の変化を検出するための調査デザインはどうあるべきか、をひとしきり議論して、大垣さんはまた自身のフィールドに戻っていった。私も作業を再開したが、半ズボン穿いた大垣さんの足がとても痩せて見えたのが気になっていた。

大垣さんがご自身の病気を知ったのは、この後のようだ。アルゴノータの例会を10月に設定し、大垣さんが話題提供する予定だったところ、直前に体調不良でキャンセルしたい、と連絡してこられた。この時、ちょっと不吉な想像をしなくもなかったのだが、それから間もなく大垣さんはウニ相の論文の草稿を送って来られた。大垣さんはいつもながら仕事が速いなあ、大した不調ではなかったか、と思ったのだが、実は夏にがんで余命6ヶ月と告知された後、大垣さんは未発表論文の公表に残りの人生を費やすと決め（大垣, 2012）、全身全霊を捧げていたのだった。それを私に対してはおくびにも出さず、お互いに修正意見を出しながら、幸いこの論文（大垣ら, *in press*）は翌2月に学会誌に受理された。そのうれしい報せもつかの間、大垣さんは私にメールで病気のことを告げられた。そして、例の番所崎貝類相の長期変動の論文をまだ出せていない、この草稿に対するコメントと、できれば共著になってもらい、自身に何かあった時はどこかへ公表を、と相談された。もちろんお断りする理由はない、とお返事をして、送ってもらった草稿にきちんと目を通してからお会いしに行こうと思った。細部に妥協しない大垣さんの手前、中途半端な読み込みで訪ねるのは失礼だと思って、すぐに駆けつけるということをしなかった。しかし、私の仕事の進め方は、大垣さんには遅すぎた。

論文については重い宿題をもらってしまった。それにもまして、番所崎貝類調査や畠島調査の継続のこと、このような長期生物相調査は誰が担うべきなのか、それはサイエンスとしてどのような意味があるか、そして保全にどう反映させていくのか、ということは大垣さんは常に考え、議論を投げかけていた。これは生態学者全体に課せられた宿題であるようにも思う。

亡くなられた1ヶ月後、今年も番所崎へ行って温度ロガーを付け替えた。去年のことを思い出しながら、ちょっと大きめに槌音を響かせてみたものの、大垣さんは現れない。大垣さんのような研究者が磯にいないのは、私たちにとって寂しくて、そして心許ないことである。地に足をつけて、進むしかないようである。

引用文献：

Ohgaki, S., Yamanishi, R., Nabeshima, Y., Wada, K. (1997) Distribution of intertidal macrobenthos around Hatakejima Island, central Japan, compared with 1969 and 1983–84. *Benthos Research* 52:89-102.

- 大垣俊一 (2002) 巻頭言 ぼくはどうしてここにいるの? Argonauta 6:1-2.
- 大垣俊一 (2010) 浅海生物相の長期変動 - 紀州田辺湾の自然史. 南紀沿岸生態研究室, 136pp.
(<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/iso/argo/TanabeBay2011/TanabeBay2011.html>)
- Ohgaki, S., Komemoto, K. & Funayama, N. (2011) A record of the intertidal malacofauna of Cape Bansho, Wakayama, Japan, from 1985 to 2010. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, Special Publication Series vol. 11, 311pp.
- 大垣俊一 (2012) 書評「患者よ, がんと闘うな」近藤誠: 医療と検証. Argonauta 20:12-22.
- 大垣俊一, 石田惣, 小林孝行, 長行司大也 (in press) 和歌山県白浜番所崎におけるウニ類相とその変化, 2000年と2011年. 日本ベントス学会誌.

(いしだ そう・大阪市立自然史博物館)